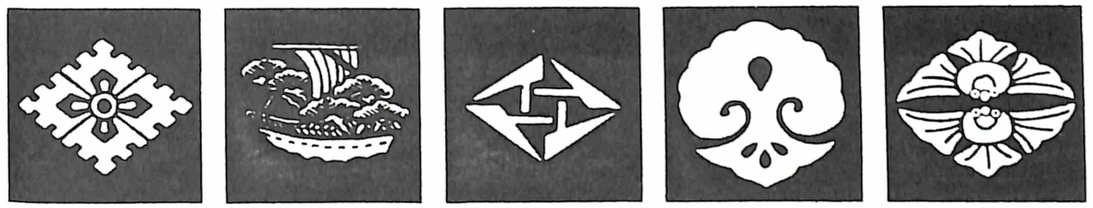


の原則を享受実践して幾世紀にもまたがり、いつも損な役回りしか与えられなかった女性を二度と二次元の世界へ戻してはならない。

最後にもう一言いいたいが、売られた娘にはもちろん何の罪科もない。まして娘を身売りした親でさえ習俗からは非難されても、経済上のしがらみからは非難の余地は全くない。

政治のからくりが上層に厚く、下層には陽の当たらない施策であれば当然のことでその証左に戦後、一次、二次と農地解放された嘉瀬の百姓は小作から自作へと転換された時点で経済力を保持し人間らしい生活が営なむことができたことを思い出してほしいのである。

喧嘩酒

……村物語……

大正から昭和の戦前迄の田舎ムードの残っていた頃、酔殿は放歌酔吟実にたあいなく、なかには日頃のウップンをマサカリに託していかくすることもあり、村の寄合いで、酒を汲み交し機会があると、一組や二組の喧嘩が始まるのは常で、酒喧嘩は、日常茶飯時のレクリェーションでもあった。

車と言いば自転車はおろか、荷車それも金輪で、砂利道にきしんでガラガラと、遠くから音をひびかせ、近くなると馬のひづめの音と調和して、いいようのないこせこせしない実生活のにおいがしていた時代は、酒呑みは、三々五々肩を組み、アッチへぶらり、こっちにぶらり、巾のある道も狭くとおり、酔歩しても不思議に自宅にチャンと辿り着いている。村の道は、俺の道路だと。

村の酔殿と呼ばれる者は、運よくば途中の、どこかの家にあがりこみ、ゴダくさんたくを並べて、酒にありつくことを目標にし、目標を付けられた家のオヤジは逃げ隠れする。

わが中山山脈の裾野にひばり付いている小さな部落にも、俗称イタコとオダコは特に有名であったと言う。ちゃんとした名は持合せているが、とにかくオダコとイタコでとおって居たと言われる。この二人に為が飛び入ると、ことさらに酒喧嘩は面倒になったと言う。

イタコはカガアに一文商いをさせて居た。二人は顔を合せると、ナンダカンダと言っては飲み、飲む程にいさかい喧嘩が常で、喧嘩別れするが、次の日に互に酒を仲介して仲直り、また喧嘩と続く次第で、

年中これをくり返しているから村の鼻つまみになり、村に居づらくなって、この山裾の小さな部落から去って行った。昭和十五、六年頃であった。

嘉瀬八幡宮境内に鎮座奉仕せる人丸神石碑に寄せて

柿本人麻呂の伝記（下編）

外崎　三千男

作歌解義（二）

万葉集　巻第二（承前）

明日香皇女の御柩を城の上の殯宮に安置した時、柿本朝臣人麿が作った歌一首と短歌

飛ぶ鳥の　明日香の川の　上つ瀬に　石橋渡し〔或は、岩浪渡し〕　下つ瀬に　打橋渡す　岩橋に〔或は、岩浪〕　生ひなびける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生いををれる　川藻ぞ　枯るれば生ゆる　何しかも　我が大君の　立たせば　玉藻のもころ　臥やせば　川藻の如く　靡かひし　宜しき君が　朝宮を　忘れ給ふや　夕宮を　そむき給ふや　うつそみと　思ひし時　春べは　花折りかざし　秋立てば　もみじ葉かざし　しきたへの　袖たづさはり　見れども飽かず　望月の　いやめづらしみ　思ほしし　君と時々　出でまして　遊び給ひし　御食向ふ　城上の宮を　常宮と　定め給ひて　味さはふ　目ことも絶えぬ　然れかも〔或は、そこをしも〕　あやに悲しみ　ぬえ鳥の　片恋づま〔或は、しつつ〕　朝鳥の〔或は、朝霧の〕　通はす君が　夏草の　思ひしなえて　夕づつの　か行きかく行き　大船の　たゆたふ見れば　思ひやる　心もあらず　そこ故に　せむすべ知れや　音のみも　名のみも絶えず　天地の　いやいや遠長く　しぬび行かむ　み名にかかせる　明日香川　万代までに　はしきやし　我が大君の　形見かここを

大意

トブトリの明日香川の上流には岩橋を渡し、下流には打ち橋を渡す。岩橋に生えてなびいている玉藻は、絶えればまた生えかわり、打橋に生えしなっている川藻は、枯れればまた生える。それなのにどうして、わが明日香の姫み子は、立たれれば玉藻のように、臥せられば川藻のように、しなやかになびき寄り合われたその似合わしい夫の君の、朝の宮を忘れられるのであろうか。夕べの宮をも遠ざかられるのであろうか。このうつし世におられた時、春は花を折りかざし、秋になればもみじ葉をかざし、袖をつらねて、見ても飽くことなく、いよいよ愛でたく思われるその夫君と、時折お出かけになって遊ばれたミケムカフ城の上の宮を、永久の宮と定められて、目で見られることも、言葉をのたもうこともなくなってしまわれた。それであるから夫の君はひどく悲しみ、ぬえ鳥のように片恋の夫となり、朝鳥のように往来される君が、夏野の草のように、思いしおれて、朝の明星宵の明星のように、あちらこちらに行きつ来つして、船のようにためらい迷っているさまを見れば、見る私さえ心を慰めることもなし得ず、そのためにいかにすることも出来ない。亡き姫み子の物語だ

けでも名だけでも、天地のように遠く長く思いしのんで行こう。それにつけては姫み子の明日香という御名につけられた明日香川は、万世の後までもお慕わしい姫み子の形見であるであろうよ。この川が。

×……×……×

短歌二首

197 明日香川しがらみ渡しせかませば流るる水ものどにかあらし
〔或は、水のよどにかあらまし〕

大意 明日香川にしがらみを渡してせき止めたならば、流れる水もしばしはゆったりするかも知れない。

×……×……×

198 明日香川明日だに〔或は、さへ〕見むと思へやも〔或は、思へかも〕我が大君のみ名忘れせぬ〔或は、みな忘らえぬ〕

大意 明日香川を明日にでも見ようと思うからであろうか、その明日香川に因みある女王のみ名は忘れはしない。

×……×……×

高市皇子尊の御柩を城上の殯宮に安置申し上げた時、柿本朝臣人麿が作った歌一首と短歌

199 かけまくも ゆゆしきかも〔或は、ゆゆしけれども〕 言はまくも
明日香の 真神の原に ひさかたの 天つみ門を かしこくも 定め給ひて 神さぶと 岩隠ります やすみしし 我が大君の きこしめす そともの国の ま木立つ 不破山越えて 高麗剣 和暫が原の 行宮に 天降りいまして 天の下 治め給ひ〔或は、払ひ給ひて〕 をす国を 定め給ふと 鶏がなく あづまの国の みいくさを 召し給ひて ちはやぶる 人をやはせと まつろはぬ 国を治めと〔或は、払へと〕 み子ながら まけ給へば 大御身に 太刀取りおばし 大御手に 弓取り持たし みいくさを あともひ給ひ 整ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹きなせる 角の音も〔或は笛の音は〕 敵見たる 虎かほゆると もろ人の おびゆるまでに〔或は、聞き惑ふまで〕 ささげる 旗のなびきは 冬ごもり 春去り来れば 野ごとに つきてある日の〔或は、冬ごもり春野焼く火の〕 風のむた なびくが如く 取りもたる 弓はずの騒ぎ み雪降る 冬の林に〔或は、ゆふの林〕 つむじかも い巻き渡ると 思ふまで 聞きのかしこく〔或は、もろ人の 見まどふまでに〕 引き放つ 矢のしげけく 大雪の みだれて来れ〔或は、あられなす そちより来れば〕 まつろはず 立ち向かひしも 露霜の 消なば消ぬべく 行く鳥の 争ふはしに〔或は、朝霜の 消なば消とふにうつせみと 争ふはしに〕 渡会の 齋の宮ゆ 神風に い吹きまどはし 天雲を日の目を見せず とこやみに 覆ひ給ひて 定めてし 瑞穂の国を 神ながら 太敷きまして やすみしし 我が大君の 天の下 申し給へば 万代に 然しも あらむと〔或は、かくもあらむと〕 ゆふ花の栄ゆる時に 我が大君 み子のみ門を〔或は、さす竹の み子のみ門を〕 神宮に よそひまつりて つかはしし み門の人も 白たへの 麻衣着て 埴安の 門の原に あかねさす 日のことごと 鹿じもの いはひ伏しつつぬばたまの 夕に至れば 大殿を ふりさけ見つつ うづらなす

いはひもとほり さもらへど さもらひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆きも いまだ過ぎぬに 思ひも いまだ尽きねば 言さへく 百済の原ゆ 神葬り 葬りいまして あさもよし 城上の宮を 常宮と 高くしまつりて 神ながら 鎮りましぬ 然れども 我が大君の 万代と 思ほしめして 作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと思へや 天の如 ふりさけ見つつ 玉だすき 掛けて しぬばむ かしこかれども

大意 口にかけるのも謹むべきであり、言葉に言うのも恐れ多い、明日香の真神の原に天皇の宮殿を、恐れ多くも定められて、神として既におかくれになられたヤスミシシ我が大君、即ち天武天皇が、お治めになる遠い国の、マキタツ不破山を越えた彼方の、コマツルギ和暫の原の行宮に天降られて、そこで天下をお治めになり、御領地を平定されるために、トリガナク東の国の軍勢を召し集められ、治まらない人をやわらげ治め、まだ仕えない国を治められるに就いて、この高市皇子を、貴い皇子の御身分ではあるが、軍の大将に御任命なされたから、皇子は御自ら大刀を取りはかれ、お手づから弓を持たれ、軍勢を率いられ、軍勢を整頓されるための鼓の音は、雷の聲かと聞える程に、又吹き鳴らすくだ笛の音も、敵を見て立つ虎のほえるのかと諸々の人のおびえる程、又差し上げられた旗のなびくさまは、春になっていづくの野にもつけられた野焼きの炎が、風に従ってなびくが如く、軍勢どもの持った弓の放たれる音は、雪の降る冬の林につむじ風でもが吹き巻き行くと思う程に聞くに恐ろしく、引き放たれる矢は数多く、大雪の如くに乱れて飛び来れば、敵対して立ち向った者も、露霜の消えやすいごとく、生命も消え失せるなら消え失せよとばかり相争っている時に、伊勢の渡會にいつき祭る神宮から、風が神風となって吹きまくり、天雲で日の光も見えぬばかりに、常闇に四方をおおい隠されて、平定された日本の国を、神として立派に統治されて、我が高市皇子が天下の政治を取り行われれば、万世の後までもかくの如くであろうと世の栄える時に、この高市皇子は薨去されてしまったので、御殿をば神の宮として飾り申し、召し使われた皇子の御殿の人も、白い麻衣を喪服として着て、埴安の池の近くの御殿の廣場に、一日中、はい伏して悲しみ、夕暮になれば、御殿を振り仰いで、そのあたりをはいまわり、侍候するけれども侍候することもかなわず、ただ悲しみに呻吟していると、嘆きもまだ過ぎ去らないのに、悲みもまだ終らないのに、百済の野を通って、皇子を神として葬り申して、城上の宮をば、永久の宮として、高くお造り申し上げ、そこに神としてお鎮りなされた。このようにしたものの、皇子が万代までもと思われて造られた香具山の御殿は、万代の後までも滅び去ろうと思われようか。天を望むがごとくにこの御殿を振り仰いで見て、それにつけて皇子の御事を思いしのぼう。恐れ多いことではあるが。）

短歌二首

200 ひさかたの天知らしぬる君ゆえに日月も知らに恋ひわたるかも
（ヒサカタノ天を治めにと上られた君のために、日月の過ぎるのも知らず、恋いつづけることであるわい。）

×……×……×

201 埴安の池の堤の隠沼（コモリヌ）の行く方（ユヘ）を知らに舎人は惑ふ。

（埴安の池の堤に囲まれた水のように、行くべき方も分らず、舎人は迷ってしまう。）

×……×……×……×

ある本の反歌一首

202 泣沢の森にみわすゑ祈れども我が大君は高日知らしぬ

（泣沢の神の森に、みわを置いて祈るけれども、我が大君は薨去なされてしまった。）

×……×……×……×

柿本朝臣（アソミ）人麿が、妻の死後、ひどく悲しんで作った歌二首と短歌

207 天飛ぶや　軽の道は　吾妹子が　里にしあれば　ねもころに　見まくほしけど　やまず行かば　人目を多み　まねく行かば　人知りぬべみ　さねかづら　後も会はむと　大船の　思ひ頼みて　玉かぎる　岩垣淵の　こもりのみ　恋ひつつあるに　渡る日の　暮れぬるが如（ゴト）　照る月の　雲隠る如　沖つ藻の　なびきし妹は　もみぢ葉の　過ぎていにきと　玉づさの　使の言へば　あづさ弓　音に聞きて〔或は、音のみ聞きて〕言はむすべ　せむすべ知らに　音のみを　聞きてあり得ねば　わが恋うる　千重（チヘ）の一重（ヒヘ）も　思ひやる　心もありやと　我妹子が　やまず出で見し　軽の市に　我が立ち聞けば　玉だすき　畝火の山に　鳴く鳥の　声も聞えず　玉ぼこの　道行く人の　一人だに　似てし行かねば　すべをなみ　妹が名呼びて　袖ぞ振りつる。

〔ある本に「名のみ聞きてあり得ねば」という句もある。〕

大意

アマトブヤ軽の道は、我妹子（ワギモコ）の住む里であるから、よくよく行って見ようと思うけれども、常に行ったのでは人の目がうるさく、しばしば行ったのでは人が知るであろうから、サネカヅラ後々も長く会うようにと、行く末をオウブネの頼みに思って、タマカギル岩にかこまれた淵のように、人に知れないように恋い恋いしているのに、天を行く日の暮れてしまうように、月の雲に隠れるように、海の藻草のなびくように寝た妹（イモ）は、モミヂ葉の過ぎ、死んでしまったとタマヅサの使の者が言うので、アヅサユミその話を聞いて、どう言い、どうすべきかてだても分からず、また話だけを聞いてじっとしておれないので、恋いしく思う心の千分の一でも、思い晴らす心になるかと、我妹子（ワギモコ）が常に出て見た軽の市に、立ち出でて聞けば、タマダスキ畝傍の山に鳴く鳥の声のように、恋しい妹（イモ）の声も聞えず、タマボコの道を行く人も、ただの一人妹に似た者は通らないから、どうすることも出来ず、妹の名を呼んで袖を振った。）

短歌二首

208 秋山のもみぢを茂み惑ひぬる妹を求めむ山路知らずも。〔或いは道知らずして〕

大意

秋山の紅葉が茂くあるので、その中に迷い入った妹（イモ）を、尋ねて行く道が分らない。

×……×……×……×

209 もみぢ葉の散りぬるなべに玉づさの使を見れば会ひし日思ほゆ。

大意

もみぢ華の散ると共に、妻の亡くなったという使を見れば、妻と一緒にいた日が思い出さえる。（完）

(4) 嘉瀬の神社に関する主要論文

① 稲荷神社（３集）

② 山のこと、あれこれ（３集）

③ ふるさと探る(2)……十和田様（４集）

④ 嘉瀬八幡宮（５集）表紙と表紙解説

(5) 嘉瀬の寺院に関する主要論文

① 辻地蔵（３集）

② 伊勢参宮寺請証文（３集）　古文書

③ 出国寺請証文（３集）　古文書

④ 曼陀羅地獄絵（一部）（４集）表紙と表紙解説

⑤ 古き仏壇を尋ねて（５集）

(6) 嘉瀬の文化に関する主要論文

① ねぶた考（３集）

② 俳人の流れとその人脈（３集）

③ イタコ・ゴミソは津軽のかたりべではなかったか？（３集）

④ 柿本人麻呂の伝記（３・４・５）

⑤ 砧句碑へ道程（５集）

(7) 嘉瀬の風俗に関する主要論文

① 遊びの回想（３集）

② 借子と雇いの告白（３集）

③ 米糠三升・津軽ネブタ（４集）紙上討論セミナール

④ 山のオキテ（４集）

(8) 嘉瀬の人物に関する主要論文

① 嘉瀬の桃（３集）

② 山中利一（４集）

③ 小山内漫遊（４集）

④ 玉ノ井村エ門（４集）

⑤ 沢田政由（５集）

(9) 其他の主要論文

① 米価変動と生産量（４集）

② 山中日記　社会編、農業気象編（５集）

(10) 其他私の興味をそそった文

イ 蛇体穴具聞　ニ 奉加帳嘉瀬今昔

ロ 遊びの回想

ハ 借子と雇いの告白

御礼のことば

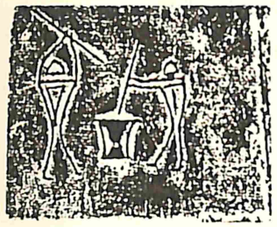
在京青森県人会元事務局長成田勇司先生には、ご多忙中にもかかわらず「かたりべ」のために、種々御丁寧なご教示とご感想を賜わり、心から感謝を申し上げます。

在京県人会常務理事湯本正美社長には、常日頃御高配をいただいておりますが、この度は親身をつくしたご配慮とご指導を賜わり、私たちには忘れられないご恩と、深く感謝しております。

会員一同、さらに努力を重ね郷土の遺産を後世に伝えるべく「かたりべ」続刊に努力する所存でございます。

今後ともよろしく、ご高配を賜わりますようお願い申し上げます。

嘉瀬ふるさとを探る会
会長　木村治利



ども古くから盛んであり、また人丸の伝説から和歌なども盛んではないでしょうか。

また、「ふるさとを探る会」が結成されて、文化事業を積極的に進めていることや、『ふるさとのかたりべ』を発行して文化活動を展開していることなど、他の市町村には見られないことです。ともあれ、嘉瀬は非常に高い文化を持っている土地柄だと認識を新にしました。

② 「ふるさとのかたりべ」を読んで

発行されている「ふるさとのかたりべ」は、郷土誌としては、全国にも例のない優れたものだと思います。嘉瀬でも錚々たる文化人で結成された編集スタッフが、その構想を練りに練って企画しており、記事の内容も極めてユニークであり、文章も推敲に推敲を重ねる名文です。

丸一年の月日をかけて調査し、検討した上で執筆しておりますから、どの論文も完璧だと言えます。

③ 「かたりべ」刊行の目的

嘉瀬地方（広く言えば津軽半島）の歴史には、不明なところが沢山あると言われております。これは、津軽為信が津軽地方を平定した折に、為信に都合の悪い歴史は一切抹殺し、都合のよい部分だけを取上げて津軽藩史を作り上げているからです。

<付記>　津軽の歴史を正しく理解するためには

(1)　東日流（つがる）外三郡誌　上中下の３巻

(2)　つがるの夜明け　　４巻

などを読む必要があります。

「かたりべ」刊行の目的の一つは、このように嘉瀬の歴史の不明な部分を明らかにしようとすることにあります。他面また、嘉瀬に現存する神社・寺院・古文書の遺跡・言葉・風俗・伝説などを手がかりとして、嘉瀬の原始時代・古代・中世代・近世代の姿を、少しでも鮮明にしようとする壮大な目的もあるようです。

「ふるさとを探る会」の手によって発掘される数々の事績は嘉瀬の歴史的遺産であり、今後かけがえのない嘉瀬の貴重な文化財となるでしょう。

④ 記事の分類

各集の記事は二度にわたって読みましたが、その内容の同類なものをまとめ、下記のように分類して見ました。

辻地蔵、伊勢参宮寺請証文、出国寺請証文

曼陀羅地獄絵、古き仏壇を尋ねて

を抜き出して見ると、これらはいずれも嘉瀬の仏教に関係した記事であります。これをまとめると「嘉瀬の仏教」という的が浮び上ってまいります。

分類表を掲げます。

(1)　嘉瀬の地名に関する主要論文

①　嘉瀬の語源（３集）紙上討論セミナール

②　嘉瀬考（その一）（４集）

(2)　嘉瀬の村づくりに関する主要論文

①　奉加帳嘉瀬今昔（４集）

②　藩政時代の嘉瀬を探る（５集）

③　町内名の語源とその由来（５集）

(3)　嘉瀬の言葉に関する主要論文

①　嘉瀬奴踊歌詞「タタラビの花」（５集）

②　嘉瀬言葉考（５集）

③　津軽の言葉・嘉瀬言葉（５集）

として津軽民謡の座を確立した功績は、甚だ偉大であると評価されている。

(5)　名声があがるにつれて、彼の心に魔がさしたのか、桃は酒と女と博変に身を持ちくずした生活が続いた。そして、昭和６年春まだ浅い３月に、青森市の一陋屋で看取る身内もなく、静かに津軽民謡に賭けた生涯を閉ぢた。まだ前途ある４６歳の若さであった。

× ┈┈ × ┈┈ ×

大要以上の評伝を読み、入り代って私の脳裡に浮んでくるのは終戦後間もない頃、東京に巻き起った津軽民謡ブームのことである。

時は確か昭和２５年頃だと思うが、首都は空爆あとの復興に忙しく、地方からは職を求めておびただしい人口の流入が続いた。まだ闇市も盛んで人々の心を慰める娯楽はどこにも見当らなかった。

その頃、浅草吉原に一大殿堂の民謡酒場が開店された。優に千人近くの客が収容できる荘大な建物である。そして、この酒場の興行は、驚いたことには、オール津軽民謡だったのである。当時とすれば奇想天外の企画である。さらに驚いたことは、７０名の唄手は、全員黒石出身であったことである。

彼等が、舞台で、渋い重味のある津軽三味線の音色に合せて、津軽民謡の絶妙な節廻しの、じょんから節、よされ節、弥三郎節などを唄い終ると、場内は嵐のような拍手が鳴りやまなかったのである。こうした光景は、連日満員の盛況で幾日も続いた。

これは、明らかに津軽民謡ブームを巻き起していたのである。この原因をあげて見ると、当時の人々はまだ娯楽に飢えていたこと、津軽民謡が舞台の芸能として桃によって確立されていたこと。さらに、津軽民謡そのものが首都の人々には目新しく耳新しく映ったことの、３点が考えられるのである。

このブームは、忽ち膝元の東京都内や周辺都市に爆原の火の如く広がり、さらに中京関西にまで及んで、大小無数の民謡酒場が開店され、また関連して津軽民謡教室や、津軽三味線道場などが開設され、今日でもこれらの看板を見るのである。

津軽民謡ブームの旋風は、目ざとい放送界は見逃す筈はなく、続々と番組に取入れた。今日では各局とも全国各地の民謡を織りまぜた番組を編成し、毎日これを放送して国民の心を楽しませていることは衆知の如くである。

民謡はまさに全盛時代に到来したのである。津軽民謡の魅力は、節廻しの妙を極めている点にある。この絶妙さの故に聴衆は割れんばかりの拍手を贈るのである。この絶妙さは、桃が観音山での修業時代に、骨を砕き身を削る程の苦心を重ねて創作したところである。それ故にこそ『嘉瀬の桃』を『津軽民謡の元祖』と呼ぶのである。

また、津軽民謡は、桃の手によって、舞台の上で興行する芸能にまでその価値を高められている。

戦後、民謡は国民の娯楽として一大飛躍を遂げ、今や黄金時代を迎えている。その大きな飛躍発展火種となったのが、上記、二つの桃の遺した業績ではあるまいか。

桃の終焉は薄幸であったが、民謡界に遺した偉大な足跡は、今もなお燦として輝き続けている。

① 嘉瀬は文化の高い土地柄

『かたりべ』を読み終って、嘉瀬には実に多くの文化人が住んでおり、それに関連して、文化活動のすこぶる活発な土地だと思いました。俳句な

が流行して多数の死者を出した地域に発展し、その歴史も古い。太古の昔から嘉瀬地方は、厳しい寒冷や風雪によって凶作に見舞われる年も多く、平年でも苛酷な年貢米に苦しみ抜いてきた先祖が、村全体の安全と平和を願い、また主婦達があの世のわが子の冥福を地蔵信仰に求めたのもけだし当然であろう。

「曼陀羅地獄絵」は、嘉瀬にある浄土宗の妙光庵の寺宝で有名である。天保９年の作で、妙光庵十四世庵主が寺に持込み現在まで伝わってきたとされている。

地獄思想は、今から千年前、天台宗の高僧源信がその著「往生要集」に地獄の陰惨な世界と、因果応報の救いを説いた名著であるが、後年、それが絵画や彫刻によって広く国民に普及した。

嘉瀬の人々も、昔からこの地獄絵図から地獄の恐しさと、因果応報の教いを学びとり、善男善女として育くまれたのである。

「古き仏壇を尋ねて」は、現在嘉瀬にある古くて由緒のある仏壇を記録しておくのが目的だという。

村に現存する由緒ある仏壇として

1, 原田家の曹洞宗の仏壇

2, 沢田家の浄土真宗東本願寺派の仏壇

3, 木下家の浄土真宗東本願寺派の仏壇

4, 鳴海家の曹洞宗の仏壇

の四基を選び、その製作年代、入手経路、ご本尊、仏壇の規模などを説明している。

以上の仏壇から嘉瀬にはかなり古くから禅系統の曹洞宗と、浄土教系統の浄土宗と、浄土真宗が伝来していることが知られる。

これらの仏教は、いずれも鎌倉時代に創唱された日本仏教であって、曹洞宗は道元を開祖とし、専ら坐禅することによって悟りを開くことを学び、主として武士階級や上層階級に普及した。

また、浄土宗は法然を開祖とし、浄土真宗は法然の弟子親鸞によって創宗され、共に念仏を専称することによって阿弥陀如来に救われ、極楽に往生すると説かれて、農民や下層の庶民階級に広まったのである。

今ここに、嘉瀬と仏教の関係を考えて見るに、嘉瀬の人々は古くから地蔵信仰によって、また鎌倉時代以後は、禅宗や浄土真宗、その他の宗派の仏教によって、わが心に安心立命の安らぎを与えられて、日々の生活を送ってきたことが知らされる。嘉瀬と仏教は、このように密接に結びついていたことが改めて認識されるのである。

４　嘉瀬の桃

津軽民謡の元祖「嘉瀬の桃」こと、黒川桃太郎の経歴や許伝は、第３集の表紙、表紙解説で、また第４集の「嘉瀬の桃」の２編で詳述されておる。その要点をまとめてみると、

(1) 桃は性来の唄好きで、子供の頃から、門付の坊様の唄う歌について廻り

(2) 青年時代に、神原仁太郎に弟子入りして、唄と三味線を本格的に習い

(3) その後、観音山を歌の道場として、歌詞と節廻しの研鑽に心血を注いだ。この努力が実って、村々の例祭の競演会でも、桃の唄ったあとには唄手が出なかった程であり、この時代は桃の唄の絶頂期であった。

(4) 彼は実力者となるとともに、民謡一座の花形看板となって、東北地方から遠く北海道や樺太まで巡業して、津軽民謡を唄い続ける旅芸人となっていった。このように、地方巡業によって津軽民謡を舞台にのせ、優れた芸能

５集の嘉瀬言葉考と、同じく第５集の津軽の言葉、嘉瀬言葉の３編がある。

「第３集の嘉瀬言葉考」は、現在嘉瀬で使われている方言の起源を、純粋な日本語の古形的漢字から解釈した論説である。

また、同じ題名の「第５集の嘉瀬言葉考」は、嘉瀬で用いられている方言３０語を、前者同様の手法で漢字を当嵌めて解説した一文である。

このように嘉瀬の方言も、漢字によって解説すると、その由緒は極めて正しく、成程と納得もできるのである。

郷土人としては是非共身につけておくべき知識である。「津軽の言葉・嘉瀬言葉」は、津軽言葉を含めた嘉瀬言葉で、今も用いられている４３語の意味を解説しているが、筆者は「今のうちに普通に用いている方言を記録に残しておきたい」とも語っているが、やがては古語となり、死語となって失われゆく方言を保存することは、文化財保全の立場からまことに適切な意見だと思う。

津軽の方言について、私には忘れることのできない一つの感想がある。今、それを述べて見たい。

昭和３３年頃は、日本の経済も高度に成長して、工業労働者が著しく不足し、中学卒業生が「金の卵」と呼ばれて、全国から集団就職列車で主要工業都市に就職したことがある。もちろん、津軽地方からも、毎年男女1,０００人を超える中学卒業生が上京して、それぞれの事業所に就職した。

ところが、彼等の一番困ったのは言葉の問題だった。津軽弁丸出して話し出すと、中々意味が通じなく、会話は円滑に運ばない。時には周囲から爆笑されることもある。勢い無口になって、うっ気が心内にこもる。職場も面白くないし、寮室で同僚と語るのも楽しくないという具合で、前途に明るい希望を抱いて上京した筈の津軽の若人の中には、逆に劣等感と羞恥感を背負わされて、悶々の心情で帰郷した者もかなりの数あったことを見聞している。もし、これらの若人が、自分の使う方言が極めて由緒の正しい言葉であることを理解しておったならば、このような悲劇が起らずに済んだのではないかと思われてならないのである。

方言教育の問題は、門外漢の私には知る由もないが、今日標準語が一般化して不便はないとしても、郷土で方言が使われている限り、県や市町村の教育委員がこの問題を取上げて検討し、また学校教育の場でも、積極的に方言教育がなされて然るべきではないだろうか。

以上のように考えて見ると、この方言を扱った３編は重要な論説であると思う。

３　嘉瀬と仏教

嘉瀬の仏教に関する論述は、写真ルポ辻地蔵（３集）、表紙曼陀羅地獄絵（４集）、古き仏壇を尋ねて（５集）の３編と、古文書の伊勢参宮寺請証文：出国寺請証文（共に３集）が紹介されている。

ここでは、辻地蔵と、曼陀羅地獄絵と古き仏壇を尋ねての三者についての感想を記して見たい。

「辻地蔵」では、取材者が「地蔵の所在地図を見ると、村端れの辻々には辻堂があって、そこに二・三体の石地蔵が納まり、村全体を囲んで位置している。地蔵には季節の花が供へられ、真新しい着物が着せられ、顔もきれいに化粧がほどこされているのは、幼いわが子を亡くした母がその面影を偲ぶ慈愛の手によるものであろう。また食べ残りの駄菓子などは、信仰心の厚い老婆達が野良の帰り道供養したのであろう」と述懐している。

地蔵信仰は、天災地変の相次いだ土地や、疫病

阿部歯科院

院長 阿部 寿

五所川原市敷島町六四ノ二

電話 三五―一五四四

貯金・共済・米・肥料は農協へ……

嘉瀬農業協同組合

金木町大字嘉瀬字雲名町ノ一八ノ一

電話 (代)五三―二〇六七

組合長理事 吉崎忠直

参事 成田一弘

外役職員一同

TOTAL FASHIN

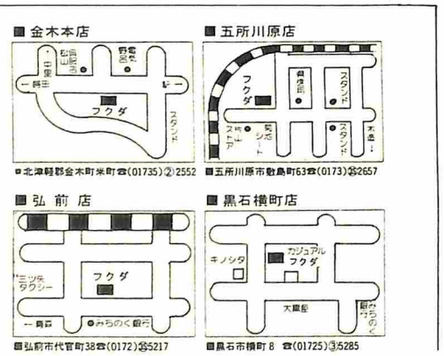
紳士服の名門

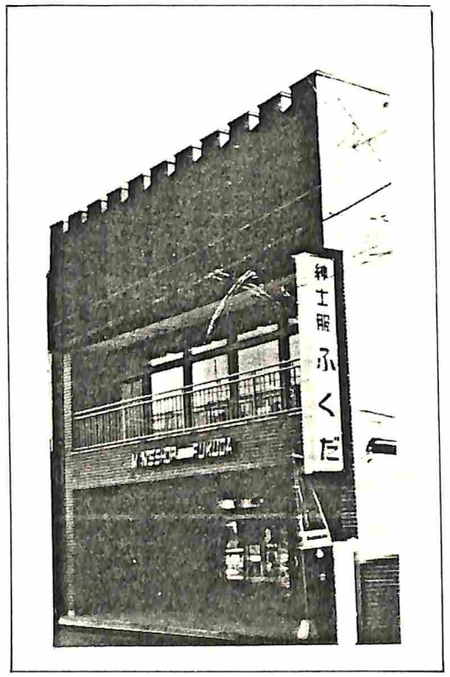
ふくだ

北津軽郡金木町米町

TELT 52－2552

社長 福田元信





ふるさとのかたりべ

―― 第3・4・5集の感想 ――

思い出るまま

成田勇司

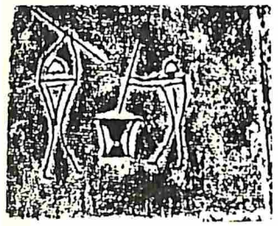
まいがき

一日の仕事を終えて夕食を過した安らぎの一時と、休日の半日を割いて「ふるさとのかたりべ」を読むことが、近頃の私の楽しみである。

読み終ると、いろいろと感想が湧き上ってくる。それを暇々に書き綴ったのが、この一文である。

畑違いの、しかも文筆にはおよそ縁遠い者の感想故拙文であり、的外れであることは百も承知であるが、蛮勇を振ってお目にかけたい。

1 嘉瀬の地名



嘉瀬の地名については、紙上討論セミナール「嘉瀬の語源」（第3集）と、嘉瀬考その一（第4集）で論究されている。

ここでは、紙上討論セミナール「嘉瀬の語源」を取上げて見たい。討論された諸説を要約すれば嘉瀬の地名は

1, 時の支配者嘉瀬光明宗範の名字からとったとする説。

2, アイヌ語の「丘が広い」の意味が嘉瀬となったとする説。

3, 稲作の水を必要とする地形から嘉瀬となったとする説。

4, 邑の位置する自然環境によって嘉瀬と呼称されるようになったとする説。

に分れるようである。

ふるさとの地名が、いつ頃、何を根拠として起ったかということは誰でも知りたいところである。

しかし、討論では、前述のように諸説が述べられて、この2点を確定することができなかった。

これは地名を決定づける確たる資料が無い以上、やむを得ないことである。

しかしながら、この討論によって、嘉瀬は歴史的に展望すれば、今からおよそ660年あるいは800年以前には既に存在した古い村であり、また地理的に見れば、広い丘陵地帯が一望に開け、そこには清い水の流れがあって、往古から、豊かな農耕を営む適地であったことの2点が、殆どの論者によって明らかにされたが、このことは、嘉瀬の村人達にとっては、大きな収穫であったといえるのではあるまいか。

討論の内容も、各筆者が、自分の確信する論拠を思う存分主張し、活気に満ち溢れ、まさに白熱戦の観がある。

素晴らしい企画であったの一語に尽きる。

2 嘉瀬の言葉

主要な論説として、第3集の嘉瀬言葉考と、第